

令和6年6月定例仙台市社会教育委員の会議 会議録

- 日 時 令和6年6月6日(木) 10:00~11:33
- 場 所 仙台市役所上杉分庁舎 12階教育局第1会議室
- 出席委員 阿部哲也委員, 安藤直美委員, 泉山靖人委員, 齋藤愛委員, 高橋美和委員, 高橋由臣委員, 内藤良介委員, 中山慎也委員, 沼里理恵委員, 野原昌之委員, 朴賢淑委員, 松本大委員, 若生彩委員
- 事務局職員 伊勢生涯学習部長, 武者生涯学習支援センター長, 小幡生涯学習課長, 加藤生涯学習課主幹, 三澤生涯学習課企画係長, 菊池生涯学習課施設係長, 細川生涯学習課生涯学習係長, 生涯学習課生涯学習係 金光寺主査, 間宮主査, 生涯学習課企画係 松澤主事

○会議の概要

1 開会

2 挨拶(松本委員長)

3 協議事項

(1) 今期会議のテーマについて

資料2に基づき, 委員から提案内容について説明があった。提案を踏まえ, 意見交換を行った。

〔意見等〕

泉山委員 資格関係を担当している先生から, 社会教育施設の利用経験がない学生が増えているのではないかという話を聞いている。こんな資格を取らないかと水を向けると, 「いや行ったことがないので」という反応が返ってくるようだ。コロナ禍の影響なのかもしれないが, そういうところに参加する経験が少ない若い人たちを, どうやって引き寄せるかという視点があってもよいのではないかと考えている。

松本委員長 若者の, 図書館や体育施設, 市民センターも様々に含めた社会教育施設の利用や参加の経験が少ないのではないかということが, 視点としてあり得るのではないかというご意見。

関連する意見でも, 別の意見でも, 他に何かあれば伺いたい。

朴副委員長 過去のテーマを見るに, 学社連携とか学社融合の観点を踏まえると4回ほど子どもに関するテーマがあったかと思う。昨年度の提言も, 子育てが一つの視点だった。それから, 今期も子どもと, 居場所というキーワードが出てきたと思う。

学社連携が言われるようになり久しいが, 学校と地域の連携は現状どうなっているのか。情報社会というところも関わってくると思う。また, 視覚障害についての話も出たが, 大学で視覚障害者や聴覚障害者に教えたことがあり, 関心を持っている。ある意味で子どもも社会的弱者・マイノリティの側面があるが, 方向性というか, 今後どういった子どもに対して, どういったビジョンでこの会議が向き合うのか。原点的なところがこのテ

ーマ設定の中で話し合われてもよいのではないか。

松本委員長　これまでの提言や答申のテーマを見ると、子ども関係、学校関係が多いけれども、その中でもどういう子どもを対象にするのかというところで、齋藤委員のテーマと関連してくるように思われるが、視覚障害だけではなくて、様々な障害を持っている子どもも含めたマイノリティをテーマにしてはどうかというご提案。

朴副委員長　私は外国人の子どもの支援を15年間やってきているので、そういったこともキーワードにしてはどうかと思う。委員長が提案された「居場所」をテーマにすると、今回出た意見やテーマの要素を全部含められるのではないか。

松本委員長　仙台市の社会教育の、もう少し大きな方向性を見据えた話を考えた方がよいのではないか、その中で外国人、子ども、障害者を含めたマイノリティという視点が大事ではないかというご意見。

高橋美和委員　まとめつつあるところで違うことを言ってしまうが、前回の事務局からの説明で、「生涯にわたり誰もが主体的に自分らしく学べる機会の充実」、「生涯にわたる学びの充実」、「誰もがいつでも学び続けることができる環境づくり」ということが言われていた。私自身がどうしても子どもと関わっているの、子どもたちが使いやすい社会教育施設は意外とあるのかなと思う。一方で、市民の皆さんとか、それから第二の人生を充実させたい方たちの学びの場というのはどんなふうになっているのかということを知りたいと思っている。

松本委員長　子どもは社会教育に触れる機会が多いのではないか、むしろ学校を出た後の大人について、生涯にわたる学びの環境づくりが重要ではないかというご指摘。確かにそのとおりで、先ほど副委員長からあった、仙台市の社会教育の大きな方針というところでも重要な柱になるところかと思う。

中山委員　全く別の意見だが、齋藤委員と沼里委員から積極的に提案してもらっているの、お二人が日頃疑問に感じたり、問題視されていたりというところを取り入れていければよいと思う。いわゆる専門の大学の先生とかの発想とは違う視点があるのではないか。

齋藤委員　委員長から提案のあった子どもの社会教育というキーワードに集約されることが、私の関心に近いと感じる。子どもの社会教育をテーマにすると、図書館の利用や放課後の支援、居場所づくりというところもいろいろ含まれ、具体例の調査もしやすいのではないか。

図書館や博物館等の社会教育施設は、学校で利用する機会があるが、そこで終わってしまうことが多いのではないかと思う。うまく活用する方法

を親自身が知らずに、広がりを生み出していけない、学校に任せきりになってしまっている現状があるのではないかと。社会教育施設をどのように子どもたちに活用させてあげられるかということが気になる。子どものうちにそういう経験を集めていると、学びの選択肢が変わってくると思うし、第二の人生を歩むにしても、子どもの頃に知った学ぶ喜びや楽しさが原点になってくると思う。その楽しさをいかに社会教育施設が提供できるか。

Chromebook が使われるようになったがゆえに、学ぶことの奥深さを知らないまま人生の選択をすることになっている子どもたちがいるのではないかと。子どもと社会教育をテーマにするといろいろ波及しやすく、様々な関心事を調べられるかなと思うので、ざっくりしているが、ざっくり感が逆によいと思う。

また、先日開いたイベントで、中山委員から理科の授業をしていただいたが、応募がとても多かった。学ぼうとする子どもたちは溢れているのだと思う。こういう機会が増えていくとよい。

スポーツ少年団も社会教育に大きな役割を果たしていると思う。地域の関わりとか、子どもたちのコミュニティに対してスポ少は大きな力を持っている。ただ年々減少していて、維持が難しい団体が増えている。スポーツのあり方も、子どもの社会教育に繋がっていく一つの事例ではないかと思う。

若生委員

いろんなご意見を伺い、やはり学校が地域の中心になっているのだなと感じた。防災もそうだし、社会学級についても、私自身は荒町小学校の学級に所属しつつ、昨日は遠見塚小学校の学級に顔を出してきた。地域と繋がる機会もあり、荒浜から集団移転した人たちがいるなというところでご協力をいただいている。いろいろなところに出かけたいということで、7月には東松島、10月には博物館に行く。

社会学級に入ること、減免によって市民センターが無料で使えたり、他の施設も割引で使えたりするので、大人の学びをアピールしていける。

防災に関しても、学校が避難所になったり、学校を中心として避難所運営委員会がつくられたりする。学校と地域をうまく繋ぐというふうになったときに、市民センターもそうだが、やはり学びが入ってくる。

また、転勤や引っ越しをしたときに、職業で繋がる人もいるし、学校で繋がれる人もいるが、主婦のような仕事や教育での接点がない存在は社会教育で、仙台でいえば市民センターの講座や、社会学級等が地域と繋がっていけるようなものかと思う。仙台はそういうものが整っていると思う。

松本委員長

仙台市においては、学校が地域の中心になっていて、そこに配置されている社会学級は大人の学びの拠点になっている。これは高橋委員のご意見にも関係してくるような思われる。また、学校は防災の拠点でもあり、学校と地域を結ぶキーワードが学びや学び合いだというご指摘。

内藤委員 委員長が仰っている子ども主体の、子ども目線の、ということが私も非常に気になる。我々大人は、大人の考え方で子どもたちに楽しんでもらおう、学んでもらおうとしているが、実際のところ子どもにとってはどうなのか。先日、植樹祭で子どもたちと一緒に植樹をしたが、ただ植えているだけなのに、楽しい楽しいと言ってやっている。大人側は、これをやることによってこういうことを学んでもらえるだろうという思惑があるかもしれないが、子どもは遊びの感覚でやっていく中で何かを学ぶのだと思うので、彼らが自由に遊べる場所というのは非常に大事だと思う。

また、市の社会教育施設をいろいろ見たときに、大人は楽しめるが、子どもには難しいのではないかとということもあった。同じ施設に何回も行ってもらえると、違う見え方があるのではないか。子どものうちに、いろんなタイミングで見てもらい、学んでもらうということが将来の社会教育に繋がるのではないか。

松本委員長 大人の目線と子どもの目線があり、子ども目線での見え方が重要なのではないかというご指摘。

高橋由臣委員 今回初めて委員として参加させていただいて、社会教育というのは各世代で着目する点が多くあり、着地点も多岐にわたるのだなと感じた。大人の居場所、子どもの居場所、退職後のステージで使う場所といったキーワードをどう絞るかということもとても重要だと思う。

PTAの立場として、子どもが大人に成長するにあたり、子どものうちにどれだけ世代を超えた交流を経験できるかということが重要だと思っている。PTA活動や地域のお祭り等で、知らない大人に怒られたり注意されたりと、先生や親以外の方々との関わりの中で度胸がつき、大人との接し方を勉強することができる。学校の中だけではできることに限界があり、そこをカバーできるのが夏休みのプール開放や秋の防災訓練といったPTA活動だと思う。防災訓練は、多感な時期の中学生が地域の大人から認められて、自信をつける機会でもある。

社会的弱者としての子どもや、不登校の児童生徒、大人、視覚障害の話も出たが、それぞれの居場所というところで着目すると、もっと広がっていくのか、何か削ることができるのか。いろんな会議や、PTA活動の中でも、正論がぶつかる場面があり、調整して前に進めていく場面もあり、このようなことさえも社会教育の一つなのかなと感じている。今皆さんがやっていらっしゃる活動についても、原点はこういうところに繋がっているといったところを宣伝しながら、それぞれ共存するような落としどころを見つけていければよいと思う。

松本委員長 居場所というキーワードを強調されたように思うが、さらに子どもと大人の世代を超えた交流も大事だというご意見。今日出た意見の中で、子どもの社会教育と、大人の学びというのがあったが、今のお話を伺って、子どもと大人の交流という視点から二つを繋げられるのではないかと思います。

た。子どもの居場所や子どもの目線について考える際も、大人がどう関わるのかというところはもちろん大事になってくる。

阿部委員

賃貸マンションの管理をやっていると、入居者から、子どもが遊んでいる声がうるさいといった苦情をよく受ける。子どもは遊びを見つけるのが得意で、ちょっと高いブロックから落ちないように歩くということも遊びになる。それを危ないと思ったり、うるさいと感じたりするような大人の感覚もあり、人によって基準が違うところだと思うが、どう考えていくのかというのが大切なところだと思っている。

前期に市民センター利用者の話を聞いたときに、大人の都合やルールでまわっているように感じた部分があった。子どもの利用が駄目なわけではないが、そのルールで大人と同じようにできるのかということを考えたときに、子どもたちが使いやすいルールを考える必要があるのではないかな。例えば、他に使っている人もいるから静かにしようねと子どもに注意するのではなく、大人の方も、子どもが使うのだからある程度のことは仕方ないというような捉え方を、いかに考えていくのかが大切なのではないかなと感じた。

また、学校で博物館に行く機会があるから家庭では行かないという話があったが、図書館や博物館は楽しみに行くところではなく、あくまでも学校教育の一環で行くところというような認識があるのではないかな。親がそう言っているのか、子どもたちが自分でそう認識するのかわからないけれども。社会教育施設というと広くなってしまうかもしれないが、民間のマイクロライブラリーとか家庭文庫みたいなところも、読書が目的というよりも、読書を通じて運営している人の人柄に触れたり、そこに集まってくる人たちとコミュニケーションをとったり、あるいは蔵書にメッセージが込められていたり、そういうことを考えると、広い意味で図書館や文庫が居場所になり得るのではないかなと感じた。「子ども」をテーマにすると、会議が収束しなくなりそうなので、読書とか何か切り口をつくった方がうまくまとまるのではないかな。私は読書に焦点をあててみたが、読書じゃなくても、どこかに焦点をあてた方がよいのかなと思う。

松本委員長

施設に関し、子どもの利用のしやすさを大人が大人の問題としてどう考えるのかという大事なご指摘と、読書を切り口にしてはどうかというご提案。

野原委員

皆さん本当に視点が鋭く、全部よいなと思っているけれども、個人的には中山委員のスポーツ関係が面白いと思う。あとは、広げたいわけではないが「子どもの社会教育」とするとその下にいろいろとテーマをつくれると思うし、多世代交流というところでうまくまとめられるのかなという気がする。

安藤委員

私もよく居場所という言葉を使う。古くて新しいような言葉と思って調べたら、昔は人がいるところという意味で使っていたが、今はその人が心を休めたり活躍したりできる場所という意味で使われている。誰の居場所なのかということところだが、地域と学校のコーディネーターをしたり、学校看護師をしたりといった日常で感じるのは、手を差し出す人は引っ張り上げやすいけれども、指先すら出さない人をどう引っ張り上げるかということところがジレンマというか悩みになっている。本当に来てほしい、届いてほしいという人には届かないし、届いたところで動かない。マイノリティという言葉につながるのだと思うが、不登校の子や親、発達障害やハンデのある人の社会的な自立に関して、居場所がほしいとか、この地域にも子ども食堂がほしいとか、こういう人たちが働けるカフェはないかなとか言っている人たちがいるので、小さくてもうまくやっているところがあれば知りたいと思うし、公的なバックアップや使える社会制度があるのかなということも気になる。広瀬高校のあり方が変わるということで、学びの楽しさ、喜び、奥深さの他に、学びの多様化とかいろいろな学び方というものもあるのかなと思う。

また、博物館や図書館には学校で行ったきりになってしまうという話だが、錦ヶ丘の子は勝手に天文台に行っている。近いので、好きな子はちゃんと活用している。場所の問題が大きいと思う。市バスとか地下鉄とか、子どもが一人で行けるシステムが整備されるとよい。

松本委員長

居場所という言葉に「安心できる場所」という意味もあるということと、誰の居場所なのか考えたときに、指先すら出せない人をどう引っ張り上げるかということが重要であるというご意見。キーワードとしてマイノリティに加え、学びの多様性をどうつくっていくのかということで、多様性という言葉も挙げていただいた。また、子どもの社会教育施設の利用について、地域によって状況が変わってくるという問題があるのではないかとご指摘。

朴副委員長

委員長や皆さんから居場所というキーワードが出ているが、それが社会教育施設であろうが、学校であろうが、民間の施設であろうが、利用者から見て魅力のあるところに集まるのだと思う。市民センター・公民館であれば、社会教育主事等そこに関わる方のアイディアとかいろいろなものが総合的に噛み合って魅力が生まれてくるのだと思う。子どもの学び、大人の学び、多様性の話も出たが、自分が何かあったときに行ってみたい、ここに行ったら助けてもらえるということが居場所なのだと思う。どう絞るかという問題もあるが、社会教育施設や民間のコミュニティも含まれる、居場所づくりということが終着点の一つになると思う。

国の動向として、大人の学びが大学教育にシフトしていたり、生涯学習に関する予算が縮小されていたりする。予算が苦しい中で図書館や博物館、市民センターは一生懸命頑張っていると思うが、そういうことも検討に含めて、委員長から方向性を示していただければと思う。

松本委員長 居場所という概念がキーワードであれば、様々なところを対象に含められるのではないかというご意見。公的な施設だけではなく民間の施設、家庭、オンライン上も居場所になり得る。

誰の居場所なのかということをもう少し絞った方がよいのではないかなと思う。子どもなのか大人なのか、両方含むのかで変わってくる。今日の意見を踏まえると子どもを含めるというのは確定してよいと思われるが、それ以外の人たちの居場所をどこまで取り上げるのか。

朴副委員長 前期のように二つのグループで、大人と子どもに分けるという考え方もできるし、広げないのであれば子どもだけにしてもよいかなと思う。

松本委員長 子どもに絞っても、マイノリティの居場所、学校を含めた居場所等いろいろ展開できる。

阿部委員 今後の調査でどこかに行くことになると思うが、副委員長からご指摘があったとおり、実際にそこがなぜ居場所になっているかというところ、その場所とか土地だからではなく、そこに行くと思心度がよいとか、楽しいからだと思うし、そういうところが焦点になってくるのではないかな。

松本委員長 施設にこだわる必要はなく、例えばマイノリティの方や子どもが、どういうところを楽しんでいるのかということが重要だと。

朴副委員長 最近、若者が歌舞伎町に集まっていて、売春で取り締まられてもまた別の場所に集まるというニュースを見た。稼いだお金でホストクラブに行くとのことだが、なぜそうするのかというと、自分の話を聞いてもらえるのと、仲間がいるので居場所になっているようだ。居場所ということであれば、社会教育施設に来てもらえるのがよいと思うが、福祉的な部分も関わってくるので難しいところがある。今はバーチャル空間で繋がることもできる。

社会教育委員の会議なので、社会教育施設に絞るのか、広げてみるのか検討が必要だと思う。

齋藤委員 子どもの居場所の選択については、親の価値観や情報の活用の仕方によるところが大きいかなと思う。大人は自分で情報を得ることができ、それをどう使うかも自分次第だが、特に未就学児等の小さい子どもは、親の影響が大きい。自ら情報をとりに行き、子どもの特性に応じて提案できる親もいれば、そうすることが難しい親もいると思う。子どもが歌舞伎町を選ぶということについて、親も頑張ってみたけれども、子どもの情報収集能力の方が上回ってしまったがゆえに親の意向と反する行動をとってしまうということがあるのかなと思う。

私は仙台市出身ではないからこそ、比較的アンテナを張ってきた方だと思っていて、具体例を挙げると、北山のアトリエ自遊楽校というところが

ある。アートという共通のものを通して、子どもも親も救われていると感じる。お金がかかるので全員が全員享受できる場所ではないが、そういう場所が仙台にあるということを知らない人が多い。民間施設だが本当に居場所づくりに貢献しているので、そんなところを見たりすると、今後のヒントになるのかなと思う。

松本委員長 子どもの居場所を選択するのは親をはじめとした大人であるというご指摘。そういう意味では子どもの居場所の問題は大人の問題としても考えることができるかと思うし、子どもや利用者にとっての居場所を、大人や社会がどのように支援していくのかというところでもテーマを設定できるのではないかと思う。

「居場所」、「子ども」というキーワードについては合意できたように思う。公的な施設を対象とするのか、齋藤委員に挙げていただいたような場所にするのかといった、ここからどう絞っていくかという方向性については、正副委員長と事務局とで検討し、次の会議でテーマ案としてお示ししたい。

他にご意見等なければ、本日の議事は以上となる。

(2) その他

委員長より、今後の進め方について説明があった。

4 その他

(1) 令和5年度社会教育関係団体の活動実績について

令和5年度社会教育関係団体の活動実績について、事務局から資料4により情報提供した。

5 閉会

「仙台市社会教育委員の会議実施要領」第4条及び第5条に基づき会議録を作成し、同要領第6条に基づき委員長及び会議録署名人が署名する。

令和6年8月30日

委員長（署名欄）

すい 本 大

署名委員（署名欄）

齋藤 直美